

かけはし



～自分らしい生き方～



特集「それぞれの生き方」

- ・P2.3 【僕の育児休業365日】
- ・P4.5 【仕事×私×ご縁】
- ・P6.7 【人生はチャレンジ!】

【編集・発行】

彦根市男女共同参画センター「ウィズ」

〒522-0041 彦根市平田町670

TEL/FAX 0749-24-3529

E-mail with.hikone@oboe.ocn.ne.jp

【編集委員】 角田 雄祐 成宮 恵津子 山田 真紀

【表紙写真】 NEONEO

2019年2月15日発行

第34回

入場無料

託児無料
《要予約》

手話通訳あり

彦根市男女共同参画フォーラム

テーマ:

人生を100倍楽しみ、自分らしく生きる

平成31年3月3日(日)

13時20分から(開場は13:00)

会場:ひこね市文化プラザ メッセホール



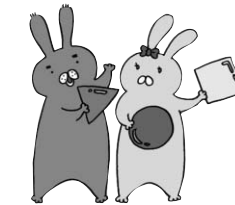
講師:露の団姫さん

(落語家・僧侶)

1986年生まれ。上方落語協会所属の落語家。
兵庫県尼崎市在住。
高座の他にもテレビ・ラジオで活動中
高校卒業後、露の団四郎師匠に入門。
3年間の内弟子修行を経て、2011年天台宗で得度。
同年11月、繁昌亭輝き賞(新人賞)過去最年少で受賞。
12年、比叡山行院で四度加行を受け正式な天台僧となる。

当日プログラム

- 13時00分:開場
- 13時20分:開会式
- 13時30分:オープニング
【子ども狂言】
- 14時00分:落語&講演
- 15時30分:終演予定



落語&講演

女らしくなく
男らしくなく
自分らしく

問合せ先 彦根市男女共同参画センター「ウィズ」 TEL/FAX 0749-24-3529 E-mail with.hikone@oboe.ocn.ne.jp

ウィズ相談室のご案内



このQRコードからアクセスできます。

専用ダイヤル 0749-21-5757

総合相談

専門相談(こころの悩み・法律相談)

水・木・金 13:00~16:00

毎月第1月曜日:心の悩み相談

*面接相談

毎月第3月曜日:法律相談

*電話相談

*総合相談での予約が必要です。

☆相談は無料です。プライバシーは守られます。☆

僕の育児休業365日

～父親にできること、働き方を選ぶこと～

眼のために育休を取る

僕は公立の小学校教員です。昨年度、一年間の「育児休業」を取得しました。社会に出て十年目、周りからは「働き盛り」と言われる年齢です。一般に「男性の育休」と聞くと母親が働きに出る代わりに父親が家事・育児を任されるというイメージが強いですが、妻は専業主婦。育休を取らなければ家庭が回らないという差し迫った状況だった訳ではありません。

では、なぜ僕が育休を取得したのか？それは「子どもとゆとりある時間を過ごしたい」という理由からでした。「四六時中父親も母親も家にいて、何するの？」とよく聞かれるのですが「娘と365日一緒に居られたらどんなに楽しいだろう」「毎日三食、家族揃って食べられたらどんなに幸せだろう」という思いで育休の取得に踏み切りました。

しかし実際には、そんなキラキラした毎日ばかりという訳にはいきませんでした。娘が五ヶ月～一歳四ヶ月になるまでの一年間育休を取得したのですが、開始早々「母親

の偉大さ」をまざまざと見せつけられることになりました。

育休を取得して間もない頃は我が子もまだ小さく「お母さんのおっぱい」が命綱。寝かしつけはもちろん、お風呂や抱っこも「ママ」と言って泣く。父親の僕がいくらあやしても泣き続け、母親にバトンタッチした瞬間にタッと泣き止む。娘から「パパ、イヤなの」というオーラをひしひしと感じる、そんなちよっと切ない毎日でした。さらに、慣れない家事にストレスも溜まります。ちよっとしたやり方の違いで「こうじゃない」「ああじゃない」と夫婦で言い合えることも。働いていた時のほうが忙しさの中にも「やりがい」や「誰かに認めてもらっている」という手応えが感じられたように思っていました。僕の育休はイメージしていたスタートが切れず、悩む日々が続きます。



職場復帰へ…

一年間の育児休業を終えて、去年の四月から職場に復帰しました。以前から大きく変わったことは、ワーク・ライフ・バランスを真剣に考えるようになったことです。まずは自分の生活・家族を大切にしたい。そのために働き方を工夫しています。定時退勤できるように仕事を効率化したり、本当に必要な仕事に力を注げるよう「やる仕事」「やらない仕事」を明確にしたり…。学校教員が「効率化」を掲げると「熱意がない」「手抜きだ」と捉える方もおられるかもしれませんが、自分が心身ともに健康で満たされていることがクラスの子どもの幸せに繋がるのだと感じています。

また、自分の生活や家族を大切にしたいという思いが強くなると同時に「働く」ことの大切さにも気づきました。忙しさの中にもやりがいのある仕事、同僚から受ける刺激が、今では僕の人生にとって重要なスパイスになっています。

働き方を選べる社会に

僕は育児休業を取ることで働き方を「選ぶ」ことができました。それは、制度として

父親にできること

ところが娘が一歳を迎えた頃から、できることが増えてきました。一緒に散歩に出かけて遊んだり、二人きりで留守番したり娘と遊んでいる間に妻が夕食の支度をするなど、家事と育児の役割分担もつまみ食いのようにになりました。初めは悩んだ「僕のポジション」も、子どもの成長に合わせて変化していくものだと体感しました。

僕にできる一番の役割は「妻のサポート」でした。「育休」と言っても、直接子育てに関わる場面は意外にも限られています。特に子どもがまだ乳児期の場合、授乳や寝かしつけなど子どもの命に関わる部分は母親に頼らざるを得ないことが多いと感じました。そんな僕にできることは、掃除・洗濯などの家事でした。子育てに追われる妻をどれだけ支えられるか、それが僕の役目なのだと痛感しました。

そして「子どもの成長を間近で見る」ことができたのは育休の特権でした。初めて寝返りをした瞬間、歩いた瞬間、「パパ」と呼んでくれた瞬間…。子どもの「その瞬間」を妻と一緒に喜び幸せな時間を共有することも、大切な役割だったと感じています。

僕は小学校教員という仕事柄、普段から働く方では、今後さらに選択肢が増えることを期待しています。ITを活用した在宅ワーク、働く時間を自由に選べるフレックスタイム制、副業や兼業、育児や介護のための短縮勤務など、もっと個人の暮らしや生き方に合わせた働き方が選べる社会になってほしいと思います。さらに子ども達の就学や進学に関して言えば、従来の公立・私立学校だけでなく、フリースクールやデモクラティックスクール※などのオルタナティブ教育※など、学び方や学ぶ場所の選択肢が増え、子どもが自分自身で「選ぶ」ことができるようになれば、日本はもっと幸せな国になるのではないのでしょうか。

もっと選べる時代に、もっと選択肢のある社会になってほしいと心から願っています。



※ デモクラティックスクール…カリキュラムや年齢によるクラス分けのない、子ども自身が学びたいことを決められる学校のこと。
※ オルタナティブ教育…学校教育法等の法的根拠を有さない非正規の教育機関と、そこで実施される教育のこと。

平成二十九年年度の国の調査によると、男性の育休取得率は5.14%。「二十人に一人」と意外に多く感じるかもしれません。国の調査では五年連続上昇・過去最高の記録となっています。ですが「一日」でも「一年」でも育休。まとまった期間取得している男性はまだ少ないであろうと考えられます。僕のように一年間育休を取得したのはレアケースでしょう。

職場の同僚にも育休の取得を考えていた方がおられたのですが「やっぱり地域の目が気になるから」と取得をためらったり、そもそも勤めている会社や企業が「育休なんか取れる雰囲気・状況でない」という人もいたり。制度として認められていても、まだまだ育休取得のハードルは高いように思えます。

どれくらい男性が育休を取得しているの？

お母さん方と関わることが多いのですが、母親が感じる子育ての大変さや、母親が子どもを大切に思う気持ちに、今までより共感できるようになったと感じます。「ちよっと一息つく暇もないくらい忙しい子育てを乗り越えてこられた先輩お母さん達。「やっぱり母はすごい」と思える、そんな一年間になりました。

仕事 × 私 × ご縁

「好奇心」と「努力」の先にあつた「ご縁」

一九八六年、香港。その頃はまだイギリスの植民地でめまぐるしい経済発展を遂げていました。その中で、港を歩き来する日本籍の**大型船**や**高層ビル**に掲げられた**日本企業の看板**は、堂々たるものでした。当時、父の転勤でその街で暮らしていた中学生の私が見た、今でも忘れられない光景です。多感な時期の異国での生活は影響が大きく、学生時代に**イギリス**への短期留学を望んだのもそのひとつです。実際に渡英できたのは、母が紹介してくれた英語の先生の存在がありました。先生のイギリス留学経験談がきっかけになったこと、惜しみないサポートをいただき実行できたこと、学生の私に一人の人として接してくださったことはその後の価値観をも変えた出会いともいえます。

私は、幼少の頃から何度も引越しを経験しました。その先々ではいつも人に恵まれました。特に、たくさんの**先生**方との出会いは、私もいつか**教職**に就きたいと思うようになった理由のひとつです。

卒業後の進路を決める頃、当時は残念ながら教員の採用はほとんどなく、一般の企業への就職を選びました。**船会社**か**建築会社**を希望し、ジャンルは異なりましたが旅客船会社に「ご縁をいただき就職しました。数年後、仕事に慣れてきた頃に週三日間、仕事が終わってから**日本語教師養成講座**の専門学校に通うことに決めました。そして、一年後、ちょうど卒業する頃に**転職になる出会い**がありました。フィジーの日本語学校の校長先生が、「欠員が出るから日本語教師をやってみない？」と誘ってくくださったのです。三年勤めた会社を退職、**フィジー**へ。当時のフィジーは発展途上国であり、日本語を習得する＝就職につながる。そして、明日の生活へつながる。と考えられておりフィジーでは、大人も子どももみんなキラキラとしたまなざしで授業を受けていました。私も生徒たちからたくさんパワーをもらいました。あれから二十年たった現在の**フィジー**では、女性の大学進学率も高く、管理職も多く勤勉な傾向があります。

私は、夢を叶えると同時に、大きな壁にあたりました。異国での一人の生活や日本とフィジーの文化の違いなどに身体が悲鳴を上げてしまい一年滞在の予定が数か月での帰国となりました。

それでもその経験が、今まで「**自分がどうか**」を一番に考えていた私の大きな転機となり、「**誰かのために何ができるか**」を考える機会となりました。

目標を持って自分なりに努力したことが、ご縁を引き寄せたのかなと思います。

「気負わず」がもたらしてくれた自然な「ご縁」

腰を据えて生活を楽しんでいた頃、ふと、「あれ、もしかしたら私は**結婚**に縁がないのかな」と思いました。**夫**と出会ったのはそんな時でした。早い、遅い、人にはそれぞれぴったりの**タイミング**があるのだなど今でも思う幸せなご縁でした。

三十九歳での結婚を機に繋がった縁は**彦根**とのご縁です。新居のアパートを探しに行った不動産会社で、「ちようど事務員さんが辞めたから、彦根に来るなら**うちで働かない？**」と誘っていたとき、仕事が決まりました。

そして、私にとってはまた大切なご縁が：**子ども**を授かることができましたのです。**子育て**の中で子どもを通して見る世界や違った自分に出会う楽しさは、これまで知らなかった世界とのご縁でもありました。**パートタイム労働**でしたが**産休・育休**をいただき、**産後職場復帰**してからは、**建築関係**の仕事にも関わることができました。けれど、自分の環境が産前とは大きく変わり、残念ながら続けることができませんでした。大切なものを知り、諦める勇氣を持たことで、昨年夏にまた新たなご縁をいただき、**教育機関**でサポートの仕事に就くことができました。夫の転勤先という頼れる人の少ない地で、子育てをしながらの仕事は、夫と二人三脚だからこそできるものです。

彦根は、**人・風・水**と、とてもいい「**気**」が流れている街だと思えます。ここですぐにご縁は、気負うことなくこれまでの自分の**自然な流れ**の中でのもののように思えます。

「ご縁と流れの中で」

人とのご縁。仕事とのご縁。そして、両親が繋いでくれたよきご縁。自分で結んだご縁。私の場合には、それらのご縁が仕事に繋がるが多かったように思います。

誰もがもつ「**ご縁**」。気づいていないご縁や一度は切れたように感じるご縁も「**過去・現在・未来**」いつか、どこか、誰かと結ばれています。

そのご縁を大切に、そしてこれから出会うご縁を楽しみに結んでいきますように。

人生は

と言われます。

高村光太郎の有名な詩の一節を昭和三十年代、小学校で習い、戦後のモノやお金のない時代、努力し頑張れば道は開けるのだと当時、子ども心に刻んだものでした。

しかし、それから時代は大きく変わり、核家族化、少子化、過疎化が進み、周りの環境も大きく変わりました。飛躍的なITの発達、情報の拡散で地球は狭くなり、民族の流動化が進んでいます。ますます、多様化し複雑化する将来を不安視しなければならぬ若い世代の皆さんに、七十年の私の人生経験が少しはヒントになるかと思いついてみました。

読書、運動、好奇心旺盛な子ども時代でした。「中学を卒業したら就職して結婚資金を貯めてお嫁に行く」と言うのが当時、当然とされた時代でした。

満州引き揚げの家族で姉が小児結核で亡くなり、六歳だった私は姉の分まで生きようと子ども心に誓ったのです。男兄弟が三人、皆、奨学資金を得て進学したのです。豊かではない家計にあつて母の農作業を手伝いながら、それでも中学、高校とバレーボールに明け暮れました。

高卒後、福利厚生に恵まれた会社に就職。女性が中心の職場でした。そして、職場結婚、共稼ぎをしながら四人の子どもを産み、育児休職、短時間社員制度を利用して働き続けました。孫をこよなく可愛がってくれる同居の義父母のお蔭なのですが、自分らしさを失うまいと毎週夕食後には子ども四人を連れてママさんバレーに出かけて行きました。

彦根にミシガン州の大学施設が誘致されてホストファミリーを引き受けたのが四十代です。当時、時間を見つけて英会話教室に通っていました。長兄が仕事で米国留学したり、外国人を家に連れてきたりしていたので「いつか、私も」との思いがあったのです。

婚家先は田舎の古い大きな建前で家の畑で採れる野菜中心の料理は留学生に喜ばれ、このような体験から伯母がカナダのトロントに住んでいることもあつて三女の米国留学を勧めたのです。

ミシガン州の大学を卒業する娘を迎えがてらマーケット市のミシガン工科大学からの留学生を訪ねました。ホストファミリーは七十代の今も続けています。アメリカの社会、政治の実態が聞けるチャンスなんです。

人生はチャレンジ！～わたしの年表～

私が勤務していた会社が民営化されたことに伴い、職種転換、職場の統廃合などで彦根から大津に配置転換されました。交代勤務のために、電車での早朝出勤や午後十一時を過ぎたの帰宅を余儀なくされました。老親の介護も重なり早期退職に踏み切ったのが五十歳。兄弟三人はすべて東京居住だったので独居老人の父を東京の長兄に託すのは忍び難く、退職して私が専業主婦になれば二人の介護は可能だと思いました。私が退職して時間的にゆとりができたことと父の存在もあつて重度の認知症の症状があつた義母は見事完治しました。退職後は、介護のほか日夏、荒神山、村々の神社仏閣を新修彦根市史のスタッフと調べ歩き、報告会を開きました。古文書類をマイクロフィルムに納めました。また「日夏歴史研究会」を立ちあげ、その成果を「日夏町史」に繋げて行くことができました。

学問をする者に歳は無いという事を実感しました。夜間主コースで入れば授業料は半額で受験の門戸はかなり広がったため合格できました。でも全国共通入試で入ってきた学生達とクラスは違うけれど同じように各種の課題論文は提出しなければならぬし中間試験、期末試験も一様に受けなければなりませんでした。孫のような世代の若者と予想問題を話し合い、歳の功で知識の分量が多い分、利点があつてもインターネットやパソコンもマスターしなければ授業についていけないのが大変でした。でも先生達は私の世代と大して変わらない人もいて授業は結構楽しかったのです。

昔の人達はどんなに苦勞して勉強したか、それに比べれば今は何でもあるし、何でもできる時代。卒業までに五年かかりましたが、その日々は私の人生の勳章のように思えます。

大学に通いながらその頃、彦根市が支援する『高齢者生き生きサロン』を有志と共に立ち上げ『木曜ハウス』と名付けました。

ヴォーリズ建築の日夏村役場の保存、維持、再生のための一助として建物を利用してサロンを開設、八年の月日が経ちました。所有者の事情で四月からは会場を自宅に移転し現在も続けています。

毎週木曜日は十時からトークと生涯学習、昼食後は懐かしい歌の合唱等、手作りの昼食を楽しみにしている高齢者のために結構、忙しいのですが、うれしいから続けられるのです。現在、ウィズで毎月第一水曜日に歴史、文学好きな人達を集めて読書会を開いています。

一昨年の核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）のノーベル平和賞の授賞式のスピーチは三人とも女性でした。フランスの閣僚は女性が半数を占め、